

昼間	Français
コース	フランス語

【英単語、3つに1つはフランス語】

大ざっぱに言って、英語はドイツ語と同じゲルマン系の言葉。他方、ラテン系のフランス語は、イタリア語やスペイン語の仲間。ところが、英語とフランス語は実によく似ています。

J'arrive à la station à six heures.
I arrive at the station at six o'clock.
 Il y a une fleur bleue sur la table.
There is a blue flower on the table.
 Avez-vous visité le musée ?
Have you visited the museum ?

比べてみると、似ていますよね。実際、英単語の1/3はフランス語とまったく同じか、あるいはよく似たスペリングです。フランス語を学ぶ上で英語の知識は大いに役立ち、またフランス語の学習は英語のより深い理解につながるのです。

こんな面白い例があります。英語で「羊」という時、「動物の羊 sheep」と「羊肉 mutton」を区別します。また、「牛 ox/牛肉 beef」、「豚 pig/豚肉 pork」も同様です。しかし、sheep、ox、pigが本来の英語であるのに対し、食肉の方はいずれも古いフランス語 moton、boef、porc に由来しています。なぜなのでしょう？

【イギリス王はフランス語を話していた】

はるか昔の1066年、フランスのノルマンディー公ギヨームが、英仏海峡を渡ってイングランドを征服しました。当時のイギリスでは、ゲルマン系のアングロ・サクソン語（古英語）が一般的でしたが、これを機に、イギリス貴族達は王の言葉話し始めます。mutton や beef の元となった古フランス語はこうしてイギリスにもたらされ、古英語と併存することになります。言ってみれば、平民が汗を流して育てるのが sheep で、貴族が裕福に食すのが mutton というわけです。以後、およそ300年の間、海の向こうのフランスの言葉がイギリスの公用語となります。

ところが、14世紀から15世紀にかけて、フランス王位継承権をめぐる、いわゆる百年戦争が起こります。その末期、苦戦を強いられていたフランスに現れたのが、あの救国の少女ジャンヌ・ダルクです。その活躍は脇に置くとして、この激闘の後、両国の言葉は袂を分かち、それぞれに個性豊かな文化を築きあげていきます。

フランスの場合、17世紀前半、地方によって異なるフランス語を統一するため、アカデミー・フランセーズが設立されました。その編纂するフランス語辞典により、フランス語は、他の国々に比べ、いち早く「国語」として整備されていきます。その結果、18世紀にはヨーロッパの共通言語（外交語）となり、現在でも、多くの国際機関で、第一ないし第二公用語です。さらに、フランス語の普及は国策でもあり、今では広く世界中で話される言葉となりました。

【フランス語はこうして世界に広まった】

さて、少々数字が古いのですが、次は世界の公用語話者ランキングです（カッコ内は母語話者）。

1位	英語	14億	(3億5000万、2位)
2位	中国語	10億	(10億、1位)
3位	ヒンディー語	7億	(2億、4位)
4位	スペイン語	2億8000万	(2億5000万、3位)
5位	ロシア語	2億7000万	(1億5000万、7位)
6位	フランス語	2億2000万	(7000万、11位)
7位	アラビア語	1億7000万	(1億5000万、5位)
8位	ポルトガル語	1億6000万	(1億3500万、8位)
10位	ベンガル語	1億5000万	(1億5000万、6位)
11位	日本語	1億2000万	(1億2000万、9位)
12位	ドイツ語	1億	(1億、10位)

(『言語学百科事典』大修館より)

BIG3 は別格として、フランス語はスペイン語、ロシア語に次ぐ6位にランクインしています。でもよく見てください。フランス語の場合、母語話者は公用語話者の1/3にすぎません（そのうちフランス人はたった6000万人）。逆にいえば、フランス語は、フランス本国以外で、はるかに多く

の人々に話されているのです。でも、なぜなのでしょう？

15 世紀に始まる大航海時代以降、ポルトガル、スペインには後れをとったものの、フランスもまた積極的に海外進出を図りました。まずは 16 世紀から 17 世紀にかけて、インド、カリブ海、北アメリカ大陸に進出しました。新大陸を北上し、たどり着いた地をカナダと名付けたのもフランス人で、その一部（ケベック）では、いまでもフランス語を常用し、カナダ本国からの独立運動も活発です。

次いで 19 世紀後半から 20 世紀前半には、北アフリカ、西アフリカ、インド洋、太平洋、インドシナが、次々とフランスの植民地となりました。植民地支配はフランスの負の歴史ですが、結果として、特にアフリカ大陸の国々にフランス語が残されたことは重要です。若いアフリカがいずれ「世界の工場」となる時が来れば、そこで用いられているフランス語の重要性はますます増すことでしょう（南米のスペイン語も同様です）。

【フランス語の今】

以上のような歴史的経緯から、現在、フランス語は 29 の国で公用語であり、部分的話者を含めると、世界の 50 以上の国や地域で用いられています。これは英語の約 80 の国・地域に次ぐものです。国際共通語の地位を英語に奪われたことは残念ですが、それでもこれらの国・地域は「フランコフォニー（フランス語圏）」の旗印のもと、2 年に一度サミットを開催し、互いに協調を強めています。以下はフランス語通用圏の一部です。

ヨーロッパ：フランス、ベルギー、スイス、モナコ

アフリカ：カメルーン、コートジボワール、セネガル、アルジェリア、チュニジア、モロッコ

北・中米：カナダ東部、ルイジアナ、ハイチ、マルティニーク、グアドループ

太平洋：ニューカレドニア、バヌアツ、仏領ポリネシア

アジア：レバノン（以前はベトナム、ラオス、カンボジアでもフランス語が通用していた）

加えて、フランスは、ドイツと並んで欧州連合（EU）のリーダーでもあり、フランス語の重要性は増しこそすれ、減ずることはありません。その証拠に、フランス語学習者の数は、これもまた英語に次ぐ第 2 位につけています。ですから、フランス語を学ぶということは、フランス本国だけでなく、世界中に散らばるフランス語圏の国々にも通ずることなのです。

【フランス語の授業について】

1 年次のフランス語 I は、アルファベットの発音に始まる「聴く・話す・読む・書く」の四技能の基礎を手ほどきします。多くの人にとっては初めて学ぶ外国語でしょうから、初めのうちは間違えるのが当たり前です。堂々と大きな声で間違えて、先生に直してもらいましょう。

2 年次のフランス語 II は、基礎の確認から発展・応用への段階です。週 2 コマの A コースはフランス語を集中して学ぶコースで、それなりのモチベーションが要求されます。他方、B コースは週 1 回だけですが、だからといってレベルダウンする訳ではありません。努力次第では A コースに劣らない効果が得られるでしょう。いずれにせよ、2 年次のフランス語は、1 年次以上に積極的な授業への参加が求められます。

もっとフランス語を学びたい人には、「フランス語上級」（3・4 年次）の履修を勧めます。また、将来のキャリアのため、フランス語検定試験にも挑戦してみてもはどうでしょうか（代表的なものとしては、日本人学習者を対象とした「実用フランス語技能検定試験」と、全世界で実施される「DELF, DALF」があります）。

さらに、本学では、短期派遣留学と長期交換留学が用意されています。前者は 2 ヶ月程度のいわゆる語学研修です。後者の交換留学は、1 年の間、本学の協定校であるポール・セザンヌ／エクス・マルセイユ第三大学で学びます。短期にせよ、長期にせよ、ますます国際化を早める時代にあって、学生のうちに異文化を体験しておくことは、将来への大きな糧となることでしょう。